

「シェイクスピアにおける殺しと 近松門左衛門における殺し」

要 春 光

少々物騒な題ではあるが、シェイクスピアの『マクベス』(*Macbeth*)における殺しと、「作者の氏神」、さらに「和製シェイクスピア」の異名をとる、近松門左衛門の『女殺油地獄』における殺しをとおして、シェイクスピアと近松門左衛門との共通性などについて述べてみたいと思う。

シェイクスピア(William Shakespeare)は、イギリスの中部、ウオリックシア州のストラットフォード・オン・エイボン(Stratford-on-Avon)に、1564年に生まれた。1616年に、いわゆる53歳でこの世を去るまでに、戯曲36編と、詩7編を創作した。そのうち、戯曲は、いわゆる、「喜劇」、「史劇」、「悲劇」の三つに大きく分けられ、ここで取り上げた『マクベス』は、「悲劇」の中にはいる。

一方、近松門左衛門が越前に生まれたのは、シェイクスピアの死後37年たった、1653年(承応2年)である。近松門左衛門とともに元禄文学を築き上げた、井原西鶴(1642—1693)にしても、松尾芭蕉(1644—1694)にしても、50歳そこそこで他界しているが、近松は72歳(1724年—享保9年)まで生きて、持てる力を遺憾なく発揮したのである。^{*-1}歌舞伎脚本30数編と、浄瑠璃90数編を創作している。近松の浄瑠璃は、大きく、「時代物」と「世話物」とに分けられるが、この『女殺油地獄』は、「世話物」の中にはいる。

上にも述べたように、シェイクスピアも、近松門左衛門も、ともに、劇作家として偉大であったばかりか、詩人としても非常に優れていた。

2 「シェイクスピアにおける殺しと近松門左衛門における殺し」

それだからこそ、ふたりの作品は、今日もなお不朽の作品として生き続けているのである。そして、多くの学者、研究家たちが、あるいはシェイクスピアについて、あるいは近松門左衛門について、研究してきている。ところがそれにもかかわらず、ふたりの生涯については、詳しいことはわかっていない。多少の記録を手がかりにして、それぞれ作品が創作された年代と合わせ考えて、おおざっぱに、その生涯をつかんでいるにすぎないのである。しかも、人の一生のうちで、人間形成、その他に、大きな影響をもたらす20代の約10年間は、ふたりとも、全く不明でもあるということは、偶然にしても、非常に興味を引くところである。おそらく、この約10年という年月に、のちに偉大な劇作家、そして詩人になる秘密が隠されているのであろう。ふたりは、それぞれ、いったいどこで、どのような修行をしたのであろうか。

シェイクスピアのほうは、1585年から1592年まで、すなわち21歳から28歳にかけて、約8年間は消息不明である。1582年11月には、18歳で、8歳年上のアン・ハサウェイ (Anne Hathaway) と結婚している。翌1583年5月には、長女スザンナ (Susanna) が誕生し、その洗礼が行なわれている。それから2年後、1585年に、長男ハムネット (Hamnet)、次女ジュディス (Judith) の双生児が生まれ、その洗礼が行なわれている。このことから、少なくとも1584年には、まだストラットフォードにいたと考えられている。この双生児誕生の記録の次に、確かな記録が現われるのは、1592年、28歳のときである。ロバート・グリーン (Robert Greene, 1560?—1592) の、シェイクスピアに対する非難がそれである。『後悔万両知恵一文』: *A Groatsworth of Wit Bought with a Million of Repentance*。いつしかロンドンに出て来ていたシェイクスピアは、そのころには、劇壇の新進として華々しい活躍をしていたようで、先輩作家グリーンのおねたみを買うほどになっていたのである。作品としては、チェインバーズ (E. K. Chambers, 1866—1954) によれ

ば、『ヘンリー六世』(第一部・第二部・第三部) (*Henry VI, 1, 2, 3*), 『ヴィーナスとアドニス』 (*Venus and Adonis*) が創作されている。それから、『リチャード三世』 (*Richard III*), 『間違いつづき』 (*Comedy of Erros*), 『タイタス・アンドロニカス』 (*Titus Andronicus*), 『じゃじゃ馬馴らし』 (*Taming of Shrew*)...と続いていく。しかしながら、この8年間の消息が不明なため、その間どうしていたのか—いつ、どうして故郷ストラットフォードを出たのか、どうして劇壇にはいったのか、劇作家としての修行を、どこで、どのように積んだのか—全くわからないのである。

一方、近松門左衛門のほうは、1672年から1683年まで、すなわち20歳から31歳にかけて、約11年間の消息不明である。もと武家の出で、祖父、杉森信重は、稲葉正則美濃守に仕え、一千石の高い禄をはんだ人である。父、信義は、越前宰相松本忠昌に仕えたが、のちに浪人して京都に住んだ。近松はその次男で、越前で生まれ、はっきりとはわからないが、10代のいつか、父とともに京都に移っている。当時の武家の習いとして、幼いころから儒学を授けられたようである。また、家族とともに俳諧もたしなんでいたようである。貞門の俳人、山岡元隣について学んでいたようで、元隣の編んだ、『宝蔵』(1671年)の追加発句に、一家の句がはいっており、近松も本名の杉森信盛の名で、一句採用されている。19歳のときである。これよりかなり前から、堂上貴族の一条恵観に仕えていた。そこでは、古典に接する機会を得ていたようである。しかし、1672年、20歳のときに、一条恵観、山岡元隣の、相次ぐ死にみまわれた。そして、それから先の消息が不明となる。やがて、30歳を越えたころ、浄瑠璃・歌舞伎作者として、劇壇に華々しくその姿を現わす。1683年、31歳のときに、最初のものとして、『世継曾我』を創作している。1685年には、狂言作者としての名を公然と掲げている。翌1686年には、『出世景清』を創作している。ただ、この消息不明とされ

4 「シェイクスピアにおける殺しと近松門左衛門における殺し」

ている年月も、『音曲道智篇』によるならば、その期間ははっきりとわからないが、近江の近松寺で寺院生活を送ったということである。そうだとすれば、ここでは、仏典の知識を多少なりとも得たことであろう。このことも考え合わせてみると、近松が、やがて劇作家として立つ準備が、この間にほとんど整ったように思われる。しかし、どうしても、一つ疑問点が残る。それは、あれだけ庶民の生活を描いている近松にしては、どうも、それまでの間には、庶民と接触する機会があまりなかったのではないか、ということである。そこで考えられることとしては、消息不明となっている時期に、寺院生活を送ったとすればその前後に、一庶民としての生活をしているのではなかろうか、ということである。そして、庶民が生きていく上で感じる、楽しみ、喜び、怒り、悲しみなどを、実際に膚身に感じ、学び取ったのではなかろうか。そして、それこそ作者として立つ準備の、最後の仕上げではなかったろうか、と思われるのである。しかし、これには確かな資料や記録があるわけではないので、全く想像の域を出ていないわけである。けっきょくのところ、この11年間は消息不明ということである。そのため、劇作家となる下地はかなりあったようではあるが、どこで、どのような修行を積んだのかは、確かなことはわからないのである。

以上のように、けっきょくのところ、シェイクスピアについても、近松門左衛門についても、確かな記録や資料が残っていないため、正確なことはわからない。しかし、それまでに劇作家となる下地があったとしても、この消息不明とされている約10年間にこそ、作者になるための最後の仕上げがなされたということは、どうもまちがいないようである。それだからこそ、ふたりとも、ひとたび30歳前後で劇壇にデビューするやいなや、その後は、次から次へと作品を創作しているのである。

『マクベス』は、1605年に創作されている。いわゆる「四大悲劇」の一つで、四つのうちでは、『ハムレット』(Hamlet, 1600)、『オセロ』(Othello,

1604), 『リア王』(King Lear, 1605)に続く, 一番最後の作品である。『マクベス』には, 何回かの殺しが出てくる。ダンカン王殺し。それに伴う, お付きの者ふたりの殺害。バンクォー親子を襲って, バンクォーの殺害。さらに, マクダフの城を襲っての, マクダフ夫人, そのむすこ, 召使いたちの殺害, と続いている。これらの殺しは, 魔女たちの予言に惑わされた, マクベスによるものである。あるときはマクベス自らの手で, あるときは刺客の手で, なされたものである。予言を信じて, スコットランド国王の地位を得んがために。そして, 予言を恐れて, その地位を少しでも長く保つために。ただそれだけのために, ただそれにかかわるといっただけで, 罪のない者が, 次々に殺されていくのである。まさに残酷無比ともいえる殺しである。

いったいに, シェイクスピアにおいては, 殺しは, 国王なり, 将軍なり, 自分の欲する地位を得るために, その手段として用いられているのではないか。少なくとも, 「四大悲劇」に限っていえば, そのようである。ある地位を手に入れるために, 全く罪のない, 恨む正当な理由もない, 兄弟を, 親を, 主君を, あるいは自らの手によって, あるいは策略によって, 死に追いやっている。そのためか, 残忍さやむごたらしさがさらに増していて, 殺しの効果がいっそうあがっているのではないだろうか。

『女殺油地獄』は, 1721年, すなわち近松69歳のときに創作されたものである。前にも述べたように, この作品は「世話物」である。「世話物」は全部で24編あるが, その中でただ一つの「殺人物」である。ところで, この作品の主人公は, ほうとう無頼の不良青年であること。その不良青年が, 周囲からの温かい愛情を踏みにじり, ついには, か弱い女性を刺し殺して金を奪う。その殺しの場のせい惨なこと。そのため, この『女殺油地獄』は, 近松のものとしては, 型破りの作品であり, 特異な存在となっているのである。

6 「シェイクスピアにおける殺しと近松門左衛門における殺し」

複雑な家庭環境のため、すねて、手のつけられない不良青年となった河内屋与兵衛は、周囲からの愛情や好意をいいことにして、したいほうだい。とうとう勘当されてしまう。ところが、期限の迫った借金がある。それも養父の印をついて借りた金である。どうしてもあすまでに返さなければ、養父に難儀がかかってしまう。そこで、近くの油屋豊島屋を尋ね、その女房お吉に金を貸してくれるように頼む。しかし断られる。すると、油を借りるようなふりをして、隠し持ったわき差しでお吉を刺し殺し、金を奪って逃げる。—これが、『女殺油地獄』における殺しである。さんざんほうとうしたあげく、借金のためにどうにもならぬはめに陥り、ついには殺しをやってしまう。このように、「金」や「義理」のために窮地に陥り、抜き差しならなくなって殺しをやる。これが、近松における殺しである。そのため、むごたらしさや残忍さを感じさせながらも、同時に、それとはいわば正反対である、殺しの張本人に対するふびんさをも感じさせるのである。

シェイクスピアの殺しと近松の殺しをみてきたが、殺しに対する姿勢というものが、根本的な所で大きく違っているようである。シェイクスピアの場合は、「四大悲劇」に限っていえば、殺しによって自分が生きる、という積極的な姿勢が感じられる。—なんとしても、自分の目指す地位につきたい。だが、その行く手をさえぎる者がいる。それをけ落とさないかぎり、それがいなくならないかぎり、自分は浮かび上がれない。より大きく生きるためには、何か手を打たなくてはならない。てっとりばやく、しかも確実な方法…それは殺しである。他人を殺せば、自分は浮かび上がれるのである。言い換えると、殺しによって、自分の運命を切り開くことができるのである。—このように、殺しに対して積極的な姿勢で臨んでいる。

それに対して近松の場合は、前にも述べたように、抜き差しならなくなって、ついには殺しをやってしまう、という消極的な姿勢である。—

殺しである以上、それなりに目的や理由があるわけで、行為としては積極的である。しかし、土壇場に追いつめられた人間が、どうにもならなくなつてやる殺しには、これによって、とにかく自分は生きるんだ、自分で運命を変えていくのだ、という姿勢はない。むしろ、自分の生き方を見失つて、どうにもならない苦しい状態にいる。この苦しみに耐えきれず、とうとう殺しをやる。一殺しに対する姿勢としては、消極的である。近松には、「殺人物」はこの『女殺油地獄』だけであるが、「心中物」がかなりあるということは、こういった消極的な姿勢によるものではないだろうか。

このような殺しに対する姿勢の違いはみられるが、シェイクスピアも近松も、それぞれ、『マクベス』と『女殺油地獄』において、同じような興味ある事をやっているのである。それは、両作品とも悪人を主人公にしている、ということである。だからといって、別にどうという事もないような気もするが、両作品とも悲劇である、ということを見ると、そう簡単にはいかないようである。悲劇とは、所作する人間の受難を演出するものである。すなわち、主人公が悪意なき、徳義をわきまえた人間であるにもかかわらず、ある必然的な不可抗力—運命とか境遇、性格など—のために、しらずしらずのうちに罪過を犯してしまう。しかし、それは自分の自由意志による結果ではないので、それに対して責任がないにもかかわらず、難儀にあい、不幸に陥ってしまう。この主人公の悲しみや苦しみに、あるいは不当な立場に、観客は同情し、涙をもながすのである。それが悲劇である。しかし、主人公が悪人—徳義のない者、悪意に満ちた者、あるいは犯罪者など—である場合は、たとえその主人公が不幸に陥っても、むしろ喜ばれることはあったとしても、同情を引いたりすることはないのである。こうなると、もう悲劇ではなくなってしまう。つまり、アリストテレス (Aristotelês, 384—322 B. C.) の言うように、悪人は悲劇の主人公にはなれないのである。

8 「シェイクスピアにおける殺しと近松門左衛門における殺し」

ところが、前にも述べたように、この二つの作品は悪人が主人公である。それにもかかわらず、両作品とも、悲劇としてりっぱに成り立っている。いったい、これはどういうことなのであろうか。ひょっとすると、ここらあたりにも、シェイクスピアの、あるいは近松門左衛門の、偉大さが隠されているのではないだろうか。本来ならば、悪人を主人公にすれば悲劇ではなくなってしまうのに、あえて悪人を主人公にして、ちょっとくふうをこらし、りっぱな悲劇にしたてあげてしまっている。

『マクベス』の場合は、魔女の予言によって、マクベスの心に潜在していた野心が呼び覚まされ、それが燃えあがって、悪事へと大きく広がっていった。そのあまりの恐ろしさにおびえながらも、ついには決行する。しかし、それを行なった次の瞬間から、もう自分のやった事に悩まされる。つまり、ひどい自責と悔恨の念にかられるのである。(これは、まだ第二幕第二場である。) それから先は、その悪事の幻影に悩まされ、それを消さんがために、次から次へと悪事を重ねていくのである。そのたびに、悪事に対する恐れは薄れていく。その反面、マクベスの心は、そのたびに人間性を失って、ボロボロになっていく。ついには、愛する妻の死にさえも、心を動かさなくなってしまう。こうなってしまうとは、もう人間失格である。いかに悪人とはいえ、このように人間としての心を失ってしまうところまで落ちぶれてしまったマクベスに対して、観客も、一種の哀れみというか、同情のようなものを感じざるを得ないのではないだろうか。もちろん、それは筋の運び方のうまさだが、そう感じさせるのであろう。つまりは、シェイクスピアの偉大さといえるのである。

『女殺油地獄』の場合は、複雑な家庭環境をいいことに、したいほうだいをしていた不良青年与兵衛も、とうとう勘当されてしまう。ところが期限の迫った借金があり、これを返さなければ養父に迷惑がかかる。しかし、金はないし、どうにもならない。といて、このままでは済まされない。思いあまって、油屋豊島屋に借りに行く。留守をあずかってい

た女房お吉に、断わられてしまう。すると隠し持ったわき差しで刺し殺し、金を奪って逃げる。そのお吉の三十五日に、そしらぬ顔で豊島屋を訪れる。だが、ついに捕えられる。—これでは、いかに与兵衛が養父に迷惑をかけたくないばかりに悪事を行なったといっても、同情の余地はない。このままでは、悲劇ではなくなってしまうのである。それを救っているのは何であろうか。それは、近松の「義理」の描き方にあるのではないだろうか。世間の義理ということから、過保護ともいえるほどの愛情を受けるが、かえってそこからはみ出してしまふ。そして悪事を行なう。しかしそんな悪人でも、最後には、心から自分の非を悟り、後悔して、「仇も敵も一つ悲願南無阿弥陀仏」と、言う。つまり、人間としての正しい生き方に気づいたのである。これこそ、人間の義理である。極悪非道ともいえるほどの人間でも、ついにはそれに気づいたということで、かえってふびんさみたいなものを感じさせ、観客の同情を引くのではないだろうか。やはり、近松の偉大さといえるのであろう。

以上、『マクベス』と『女殺油地獄』における殺しをとおして、シェイクスピアと近松門左衛門の共通する一端をみてきた。殺しに対する姿勢の違いは、時代や国柄、社会のしくみなどの違いによることもあるであろう。しかし、そういった違いはあるとしても、ふたりの殺しには、時代を越えた普遍的な人間の性質が描かれている。つまり、人間の本質とか本性といったものである。それゆえに、たとえばこのような殺しが今日起こったとしても、古くさいとか、時代錯誤である、というような感じは全くしないのである。人間の強さや弱さ、賢さや愚かさ—こういっただれもが持っているもの—を描いているからである。それだからこそ、ふたりの作品は、今日もなお上演され、あるいは読まれて、生き続けているのである。

10 「シェイクスピアにおける殺しと近松門左衛門における殺し」

注 1 *-1 近松門左衛門の作品の数であるが、いろいろな説があって、どうもはっきりしていないようである。浄瑠璃のうち、「世話物」が24編ということは一貫しているが、「時代物」は、約70編とする説と、約90編とする説とがある。また歌舞伎脚本も、約30編とする説と、約40編とする説、20数編とする説、がある。ここでは、高野正己氏（「近松門左衛門集」）と、守随憲治・大久保忠国氏（「近松浄瑠璃集下」）の説をとって、「時代物」は約70編、歌舞伎脚本は約30編とした。

9 *-2 「殺されたお吉さんも、殺した自分も、ともに仏の慈悲の誓願によってお救いください」の意。

参 考 文 献

- A. W. Verity (ed), *Macbeth* (The Pitt Press Shakespeare for Schools)
斎藤勇編 「世界文学辞典」研究社
重友毅校注 「近松浄瑠璃集上」(日本古典文学大系49) 岩波書店
守随憲治・大久保忠国校注 「近松浄瑠璃集下」(日本古典文学大系50) 岩波書店
高野正己訳 「近松門左衛門集」(古典日本文学全集24) 筑摩書房
近松研究会編 「近松門左衛門」東京大学出版会
中野好夫・小津次郎編 「総合研究シェイクスピア」英宝社
中野好夫・三神勲・福田恆存訳 「シェイクスピア」(世界文学全集1) 河出書房
久松潜一編 「日本文学史・近世」至文堂
福原麟太郎編 「英語教育事典」研究社
三神勲訳 「マクベス」(角川文庫2535) 角川書店
森 修 「近松門左衛門」(古典とその時代 VI) 三一書房